

時事相三話

二月、如月(陰曆二月の異称)、しばれ月のこのごろ、テレビ・新聞・週刊誌などの時事相を大まかに眺めてみたい。灯油高騰の波に揉まれながら、衣更着や恋人たちも ゆったりと(ひろき)した温もりを求めて…。

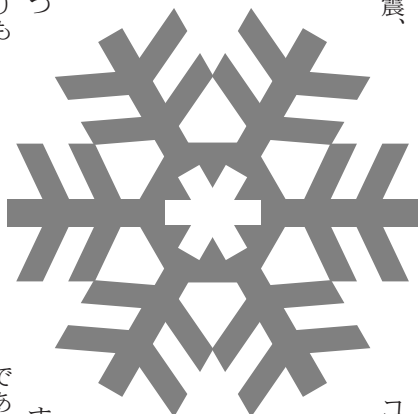
真と信：昨年の漢字は「本当に情け無い」と言われた「偽」であった。うそ、にせ、だます、いつわり等の偽であり、偽造、偽装、偽証などの偽であるから、見るからに嫌らしい漢字ではある。

すでに、真実でさえ、時と方法を選ばずに用いられてよいということはない(モンテーニ)とか、信の世界に偽詐多く、疑の世界に真理多し(福沢諭吉：学問のすゝめ)というような名句が知られているが、真と信、偽と疑をかわす味わいのある言葉ではなからうか。昨年は「食の偽」だったのだから社会的問題化したのは当然である。ただし、食品の賞味期限(数値

や線引き)もチーズやキムチの発酵食品では個々の嗅覚と味覚に頼るものもあるもので、それぞれの舌次第という論者もおられるのである。

コワイ存在：地震、雷、火事、親爺とはよくいわれる諺である。むかし。若い者にとつてコワイものは親爺さまで、コワイ存在であった。こうしたコワイものを持つことによつて何よりも

屈辱感に耐えるということをや学んだ(遠藤周作：勇氣ある言葉の要約)という。だが、「屈辱感に耐える訓練」が行われなくて社会から大人あつかいにされると、おのれのすること、なすことはすべて正しいと思うようになり、タクシーに乗車中



の交叉点で、オートバイに友人をのせた若者が車と車との間をアクロバットのようにぬいながら走っていたので、運転手さんが「危ないじゃないか」と注意すると、「こつちが楽しんでいことに口を出すな」と怒ったというのである。狐狸庵先生こと周作さんは更に「地震、雷」ではなく反対に「自信か、身なりか」が多いし、屈辱感に耐える力がないので

コワイものがない。畏れるということを知ると、知らないし、畏れると、恐れるとのちがいを知っていないと説いている。恐れるとは権力などにビクビクすること(編集部注)であるが、人間をこえた

天とか神とか道とかに畏敬の念を持つことである限り、「親爺の権威失墜」をなげくだけの情け無いコワイ存在は最早ありえない昨今なのである。

脱温暖化：二〇〇八年(平成二〇)七月の洞爺湖サミットの主なテーマは「温暖化から地球をどう

救うか」である。そこで、「自分の生きていようちは大丈夫だろう。」が、子孫はどうなるのだらうか。なんといいなくても、「自分たちが豊かになつていないのに、先に発展した国のせいで、真つ先に温暖化の影響にさらされるという発展途上国」にとつての理不尽な話である。

足元からの新年三題に続いて、蝕み忍び寄る温暖化を再認しながら、ゴミの減少、地産地消、不熱心な企業製品の不買運動などを通じた個々人の「生き方」にもかかわるともいふ。

ともかくにも、「××よ、お前もか」の偽が横行しては正に看板が泣くだけとなり、親爺よりコワイ銃や刃物などによる犯罪が続出し、「自分がその下で憩うことのない木を植える高齢者」は一人もいなくなる。情け無い。さてさて、時事相三話に因んだ町の風の吹き回しや如何…であるか。

前中央分館長
尾池隆男